

九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室  
**開講百周年記念誌**



## 久保記念館 — 日本初の医学博物館

ヴォルフガング・ミヒェル  
(九州大学大学院言語文化研究院教授)

### 建物について

第1次世界大戦後のドイツでは、ものの形をその機能に従属させる発想が誕生し、次第に世界中の設計者、芸術家、建築家に大きな影響を与えるようになった。このバウハウス学派の先駆者たちは、日本の伝統工芸や和風建築を大いに参考にしながら、都市計画をはじめ、インテリア、各種手工芸品にいたるまで人間の生活環境を設計し直そうとしていた。一方、当時の日本では、独特の折衷式の建物が広まっていた。久保記念館はその一例と言える。1927年5月8日の第20回教室創立記念日に総長、学部長、医院長の列席の上で開館を迎えたこの建物の設計者の名は伝わっていないが、様式は近世復興式と位置づけられている<sup>(1)</sup>。家紋などの伝統的図柄を連想させる装飾の少なさは和風の精神の名残であろうが、垂直線を強調する柱あるいは柱を思わせる化粧漆喰は古代ギリシアの様式を取り入れたものである。平らな屋上まで続く吹き抜け階段は、見張り塔を思わせる。2005年の福岡県西方沖地震の際には高い耐震性が再確認された。この細長く比較的高い建物の入口の左右にある祭壇や石灯籠のような短い柱が「学問の小寺院」という雰囲気を一層強調している。日本史上初の医学博物館でもある久保記念館は、当時の同窓会の方々の献身と学問に対する真摯な姿勢を伝えてくれる。九州大学の初期の建物が再開発や移転の犠牲になる今の時代に、この「宝物館」を何としても守り、後世へ伝えるべきである。

筆者は、以前、医学図書館の保存書庫を調査した際、数多くのドイツの医書に驚いた覚えがある。久保記念館の入口の横にある看板(「Kubo Museum, gebaut 1927」)のほか、久保猪之吉先生が留学先で師事したキリアン教授の胸像や書棚に並んでいるドイツ語の専門書などは、明治以降の密接な日独医学交流を物語っている。残念ながら、1927年の開館式の頃の写真はいまだ見つからない。昭和7年の教室開講25周年の際に撮影されたこの写真が、現存する最も古



久保記念館の裏側

いものかも知れない<sup>(ii)</sup>。太平洋戦争後の航空写真や、医学部全体の写真では、建物自体は確認できるが、館内の様子を観察できる画像資料は非常に少ない。20世紀後半には次第に建物の老朽化が進んだ。1997年に福岡で開催された日本医史学会の総会・大会を機に、小宮山荘太郎先生の特別なお計らいにより一度視察させていただいたが、電気がつかず、数多くの物品で部屋が非常に狭くなっていたという印象を受けた。収蔵品の保全と管理が危惧されていることは容易に理解できた。幸い四三会員の方々のご協力により、1999年及び2002年に建物の内装・外装の改修を行うことができた。これによって同館の歴史的価値も一層高まり、久保記念館を守るための同窓会の方々のご尽力は、次の世代にも大いに讃えられることと確信している。

### 館内の状況及び収蔵品について

内装改修の前に那の津寿建設研究所が館内の棚や筆筒の写真を撮影し、当時の状況を綿密に記録する『九州大学医学部久保記念館再



展示室の景観

整備計画・報告書』(2001年8月)をまとめた。それを見ると、1階には古びた木造の本棚があった。書籍は明治後期以降の学術書で、江戸期の資料は別所に保管されていた。また、外来患者日誌、入院患者日誌、直達鏡検査簿、手術簿、各種手術摘出標本、直達鏡摘出標本など教室の歴史を伝える資料もここに保管されていたようである。同じ部屋を写した別の写真に見られる「標本箱」には、ロウ細工の貴重な国産ムラージュが入っている。この1階は、もとは書庫だったと思われるが、様々な器物の寄贈により本来のスペースが減り、収蔵庫に変わらざるを得なくなったのであろう。延べ52坪に過ぎない広さで、それ以外の選択肢はなかったと思われる。

それに対して2階は展示室として利用されている。河田政一先生著「開学の精神と久保記念館<sup>(iii)</sup>」及び『九大耳鼻科1987年<sup>(iv)</sup>』という印刷物は、1970・80年代の様子を詳細に紹介している。絵画や久保先生とキリアン教授の銅像の場所に変更されたが、ケースの配置、江戸時代の写本類、明治以前の洋書、久保先生と親交のあった海外の方々からの寄贈品等々は、ほぼ当時と同様の状態で展示されている。

久保先生は、展示品を(1)図書及び図譜類、(2)専門家の肖像



旧1階及び2階の平面配置図<sup>(x)</sup>

類及び遺品、(3) 標本類、(4) 機械類、(5) 雑、のように分類していた<sup>(v)</sup>。

近世・近代洋書のほとんどは、九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科教室の目録で確認できるが<sup>(vi)</sup>、明治以前の和漢籍、文書類、器物資料は、耳鼻咽喉科学教室の所有物として保管されていたようだ。1934年11月の祝賀会のために、日本語とドイツ語による『久保記念館』が発表された<sup>(vii)</sup>。編集の責任者として凡例には「吉田、池田両学士、長野氏を始め、林、横田、柴牟田、高尾諸氏」の名が記されている。本文ではキリアン教授の胸像をはじめ「和蘭製古外科治療器械」にいたるまで計22点の記念品や医科器械が紹介されている。

開講53周年を迎える1960年に、河田政一教授の指揮の下で館内の展示資料が整理され、主要な展示品の新しい目録も作成された。執筆にあたった向野助教授は、『大日耳鼻』、『耳鼻咽喉』など様々な情報源に基づいて、内容的に充実した解説に英語とドイツ語による概要を追加し、立派な小冊子『久保記念館 目録及び解説』を編纂した。

1985年11月8・9日に、第37回日本気管食道科学会が福岡で開催されたのを機に、上村卓也教授は、福岡市民会館内で公開された収蔵品の展示目録として、この冊子の第2版を刊行した<sup>(viii)</sup>。計113点の展示品が取り上げられているが、未登録の器物資料は少なくないし、古医書の書誌情報も最低限のものに過ぎない。

2005年に筆者は小宗静男先生のお計らいで文書資料調査に取りかかった。書誌データの取り方は20世紀後半に大きく進歩した。例えば、1934年の冊子の「倭漢古医書」として「阿蘭陀外科」としか記されていない写本は、今日では次のように記録される。

「阿蘭陀外科」(外題、打付、朱字) <オランダゲカ>、写本、書写者不明、書写年不明、書写地不明、21.2×14.3mm、四つ目綴じ、86丁、一冊(「阿蘭陀藥種 以呂波寄」1~29丁、「阿蘭陀膏藥書」30~68丁、「阿蘭陀油能毒之書」69~82、無題83丁~)、朱入れあり、83丁目に挿図あり、巻末に薬名が記された14.9×77.4mmの貼り紙あり

この作業を進めるうちに、ある時点での資料の再整理を示す二つめの登録番号が付してあることが判明した。また、それらの番号を確認してみると、欠本の存在が明らかになる。行方不明になった場合もあるし、何らかの手違いで数点が医学図書館の貴重図書コレクションに入ってしまった例も確認できた。

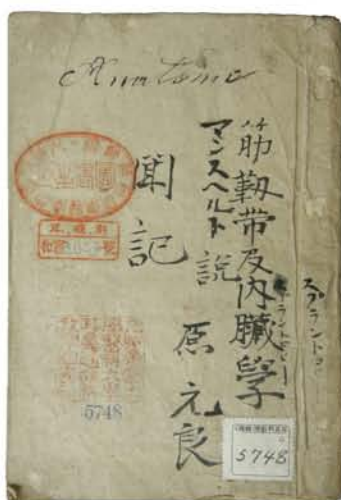
久保記念館に保管されている文書資料の中には板本と写本がある。板本は珍しいものでも全く同じものがどこかに伝わっている可能性が高いが、写本は書写者が修正、追加、削除などを行うことが多いので、各々の写本は一種のオリジナルと見るべきである。桂川甫周の『和蘭字彙』、杉田玄白らの『解体新書』及び『重訂解体新書』など、久保記念館の板本の多くはいわゆる蘭学関連の書物であるが、『外科正宗回春』や吳昆の『脉語』のような東洋医学の伝統を引き継ぐものもある。これらのほとんどは江戸期の最高水準の出版物に数えられる。写本の中では、16世紀から17世紀の30年代にかけて日本で活躍していた南蛮人の外科術を示す金瘡医書及び南蛮系とされる栗崎流医書をはじめ、代々出島商館の阿蘭陀通詞を務めた榎林家に遡るもの、外科術の巨匠華岡青洲の手術録及び東洋医学の経絡図など、江戸期の日本人の知的好奇心、視野の広さ、独創性、発明力



本木庄太夫良意(1628-1697)とその妻



二本松藩医小此木屋之が使用した外科器械（オランダ製）



長崎の精得館及び長崎医学校で教鞭を執っていたオランダ人医師マンスフェルトの講義録

などを物語るものが大いに注目に値する。

1972年に古賀十二郎は『西洋医学伝来史』に出島商館の阿蘭陀通詞・本木庄太夫良意とその妻の掛け軸を掲載したが、その出典についてはまったく触れられていなかった。17世紀の日本における西洋医学の導入で本木は重要な役割を果たした。久保記念館の調査で再発見できた肖像画は、本木の姿を伝える唯一のものとして、極めて貴重な史料である。また、地図などは人文系の研究に大いに利用できる一級品である。

展示室のケースに入っているものの中から2、3点をあげるなら、まず紹介すべきものは、二本松藩の蘭方医小此木屋之が使用したオランダ製外科器械一式である。全国各地で江戸期の輸入医薬品と医科器械の調査を行った筆者が見て

も、このような完全なセットは極めて稀なものであると断言できる。

もちろん、耳鼻咽喉科学の業績を讃えるものも数多くある。鼻茸の独創的な摘出法や咽頭検査法で歴史に名を残した片倉元周(1751～1822)の関係で、元周が著した『静儉堂治験』(寛政6年刊)と共に彼の肖像画及び三稜針、鯨骨サグリ、曲頭管入りの「サック」(更紗製)、また蔵書印と薬広告の版木は元周のご子孫から久保先生に贈られた遺品として大事にすべきである。

また、1907年に日本で最初に摘出された気管支異物や上顎洞性後鼻孔ポリープの世界最初の摘出例など、近・現代の資料も忘れてはならない。久保猪之吉先生は当時の学生にこれらのものを見せながらどのような話をされたのだろうか。

### 久保先生が寄せた思い

著名な耳鼻咽喉科教授セモン(Sir Felix Semon, 1849-1921)が鎌倉の薬店の看板を所望して強引に持ち帰り、ロンドンのウェルカム医学博物館に寄贈したことに對して「深い感銘を受けた」久保先生は、

「一寸した旅行にも心にかけて一物一片といはず博物館を充実させることにしたならば将来立派な博物館が完成する」という夢を抱いた。その理由を語る先生の言葉には視野の広さと人間性が表れている。

「今の教育は伝統を軽視し、感化を疎外する弊がある。いくら頭脳がよくつても、物識りでも人間として真摯なる所、偉大な所がなければ国家の為になることは甚だしい。古人苦心の跡を見て憤激し故人の遺品に對して感銘するといふことは現代教育の欠点を補うに最も必要なことと思う<sup>(ix)</sup>。」

- (i) 九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室編『久保記念館』、福岡、福岡印刷会社、昭和9年11月、凡例。
- (ii) 九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室『教室開講六十周年記念写真集』、1967年。
- (iii) 『学士鍋』第27号、1978年8月10日、2～5頁。
- (iv) 『九大耳鼻科1987年』九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室開講八〇周年ならびに上村卓也教授開講五周年記念出版、52頁。
- (v) 『久保記念館』、3頁。
- (vi) 『九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室図書目録 Verzeichnis von Büchern und Atlanten der Kaiserlichen Universitäts=Ohren=Nasen= u. Halsklinik zu Fukuoka (Director: Prof. Dr. Ino Kubo)』、1927年。
- (vii) 『久保記念館』、35頁。
- (viii) 九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室編『久保記念館 目録及び解説 Sachverzeichnis mit Erklärungen des Museums zur Erinnerung an Prof. Ino Kubo』、1964年9月 (13pp.)。
- (ix) 『久保記念館』、3頁。
- (x) 那の津寿建設研究所『九州大学医学部久保記念館再整備計画・報告書』(2001年8月)より。



**九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室 開講百周年記念誌**

*100th Anniversary Memorial Book*

*Department of Otorhinolaryngology, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University*

2009年5月1日発行（非売品）

編 集—九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室  
記念誌編集委員会

発 行—九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室  
福岡市東区馬出3-1-1

印 刷—秀巧社印刷株式会社  
福岡市南区向野2-13-29